

令和元年度
「大学生の力を活用した
集落復興支援事業」
(実態調査)
報告書

2020年2月

東洋大学法学部 箕輪ゼミ

目次

1	福島県矢祭町内川地区旧内川小学校再利用プロジェクトの報告にあたり	1
1-1	取組みの動機	1
1-2	調査方法と本報告書の構成	2
1-3	調査参加者	2
2	矢祭町の概要	3
2-1	矢祭町の沿革	3
2-2	合併しない宣言の経緯とその後	3
2-3	人口推移	3
2-4	位置・地勢	4
3	廃校利用の先行事例調査	7
3-1	アーツ千代田 3331（東京都千代田区外神田）	7
3-2	東京おもちゃ美術館（東京都新宿区四谷）	7
3-3	別俣農村工房「田舎の学校 きらら」（新潟県柏崎市別俣地区）	8
3-4	むろと廃校水族館（高知県室戸市室戸岬町）	9
3-5	温泉トラフグ（株式会社夢創造）（栃木県那珂川町）	10
4	前年度事前調査活動	12
4-1	第一回現地活動調査(2019.3)	12
4-1-1	活動内容	12
4-1-2	活動・調査で分かったこと	13
4-1-3	課題	13
5	2019（平成31・令和元）年調査概要の報告	15
5-1	第二回活動調査(2019.6)	15
5-1-1	活動内容	15
5-1-2	活動・調査で分かったこと	16
5-1-3	聞き取り調査結果の概要	17
5-1-4	課題・今後の展望	17
5-2	白山祭活動報告(2019.11)	18
5-2-1	活動内容	18
5-2-2	打ち合わせ・準備、白山祭での販売を通じて分かったこと	19
5-2-3	課題	20
5-3	第三回活動調査(2019.12)	21
5-3-1	活動内容	21
5-3-2	活動・調査で分かったこと	22
6	福島矢祭町内川地区旧内川小学校再利用案	24

6-1	アベンジャーズ班（吉田・豊巻・笠戸・加藤萌・森）提案内容.....	24
6-1-2	内川小学校再利用にあたっての課題.....	25
6-1-3	採用後の予想されうる問題点.....	26
6-2	カンガルー班(加藤佑佳 笹井春花 原田翔太 三田大貴)提案内容	27
6-2-1	提案概要.....	27
6-2-2	内川小学校再利用にあたっての課題.....	29
6-2-3	採用後の展望	29
6-3	YUZU 班（長谷川・田中・新井・岡澤・内野）提案内容.....	31
6-3-1	提案概要.....	31
6-3-2	内川小学校再利用にあたっての課題.....	32
6-3-3	用後の展望.....	32
6-4	D & D 班（今井・大畑・大矢・細田）提案内容.....	34
6-4-1	提案概要.....	34
6-4-2	内川小学校再利用にあたっての課題.....	35
6-4-3	採用後の展望.....	36
7	終わりに.....	37

1 福島県矢祭町内川地区旧内川小学校再利用プロジェクトの報告にあたり

1-1 取組みの動機

東洋大学箕輪ゼミでは福島県矢祭町内川地区と連携し、現地での活動や文献調査等を踏まえ、ゼミ内で分かれた4班それぞれによる内川小学校再利用案の提案をした。本活動のきっかけとなったのは、2018年9月に名古屋大学荒見ゼミと合同で実施した矢祭町での調査合宿である。2018年9月の調査合宿では、2泊3日という短い期間ではあったが、矢祭町の現況を調べる調査活動等を実施していく中で小学校の統合によって廃校となっていた旧内川小学校の見学を行い、廃校の今後の利活用を想定したワークショップを実施した¹。

一方で、現実的かつさらに洗練された旧内川小学校の利用案を考えるにあたっては、地域の人達のニーズと現状の課題を理解することをはじめとして、地域の方々と深いコミュニケーションをとっていくことの必要性を感じた。また、さらに矢祭町・内川地区の方々とその後も連絡を取っていく中で、継続したゼミと地域との連携の動きを続けていくことが、今後の廃校利用のプロジェクトの進展に向けたきっかけになるのではないかとということも浮かび上がってきた。

そうした中で出会ったのが福島県「大学生の力を活用した集落復興支援事業」である。この事業を利用することで、さらに地域の調査を進展させ地域事情を理解し、今後の可能性を検討できるのではないかと考えるに至った。

なお本報告書は、主に「大学生の力を活用した集落復興支援事業」が開始される以前のものであるが、当該事業の委託費を直接利用した調査活動以外の自主的な活動の記録も含めて収めたものとなっている。それは、箕輪ゼミの内川地区での活動や提案の全体を示していくためには、それらの経緯に関する記述も必須と考えたためである。この点についてはご留意頂きたい。

¹ 詳細については4前年度事前調査活動の1第一回活動調査(2018.9)を参照。

1-2 調査方法と本報告書の構成

本報告書は、文献調査、インタビュー調査、その他の活動記録、4班による提案書が含まれたものとなっている。2以下それぞれの部分で示しているものの概要をここに示しておく。

「2 矢祭町概要」は矢祭町で発行された文書資料等を基にした矢祭町自体の概要把握調査を示したものである。矢祭町内川地区で活動をしていくにあたって、その前提知識として町の概況を知る必要があるため、簡単ではあるがそれをまとめたものである。「3 先行事例」は廃校活用例についての文献調査と現地調査をもとにした先行事例調査を示したものである。廃校利用案を考えるにあたって、他地域ではどのような利用がなされているのか確認しておく必要があり、実施したものであり、その調査の記録である。「4 前年度事前調査活動」は2018年度に実施したヒアリング調査や現地での活動を通じた現地状況の把握についての報告である。「5 2019年度調査活動」は2019年中に実施した3度の現地訪問の活動記録である。インタビュー調査、現地での活動の記録、学園祭（白山祭）での活動状況について示している。「6 福島県矢祭町内川地区旧内川小学校再利用案」はゼミ内で分かれた4班それぞれによる再利用案の提案内容である。様々な可能性を検討するため、あえて集約はせずに、それぞれの班を並列に示している。「7 終わりに」は全体のまとめと、今後の方向性・可能性について示したものとなっている。

1-3 調査参加者

本調査に参加したゼミメンバーは次の通りである。

東洋大学法学部 4年	東洋大学法学部 3年
長谷川 優太	森 瞭太
大矢 悠介	原田 翔太
豊巻 健太	今井 理沙
三田 大貴	細田 悠輔
吉田 雄貴	笹井 春花
小野 裕輝	田中 翔太郎
	加藤 佑佳
	笠戸 遼太
	新井 瞭
	岡澤 優花
	加藤 萌絵
	内野 佑美
	大畑 琴海

ゼミ教員：箕輪 允智

2 矢祭町の概要

2-1 矢祭町の沿革

矢祭町の前身となる矢祭村の誕生からの大まかな沿革は次の通りである。

1955(昭和 30 年) 豊里村と高城村の南部が合併して矢祭村となる。

1957(昭和 32 年) 矢祭村と埜町との合併につき知事勧告、両町村の合併論争起こる。

1963(昭和 38 年) 町制施行、矢祭町となる。

1971(昭和 46 年) 矢祭町過疎地域に指定される。

2001(平成 13 年) 議会で「市町村合併しない矢祭町宣言」を決議

2-2 合併しない宣言の経緯とその後

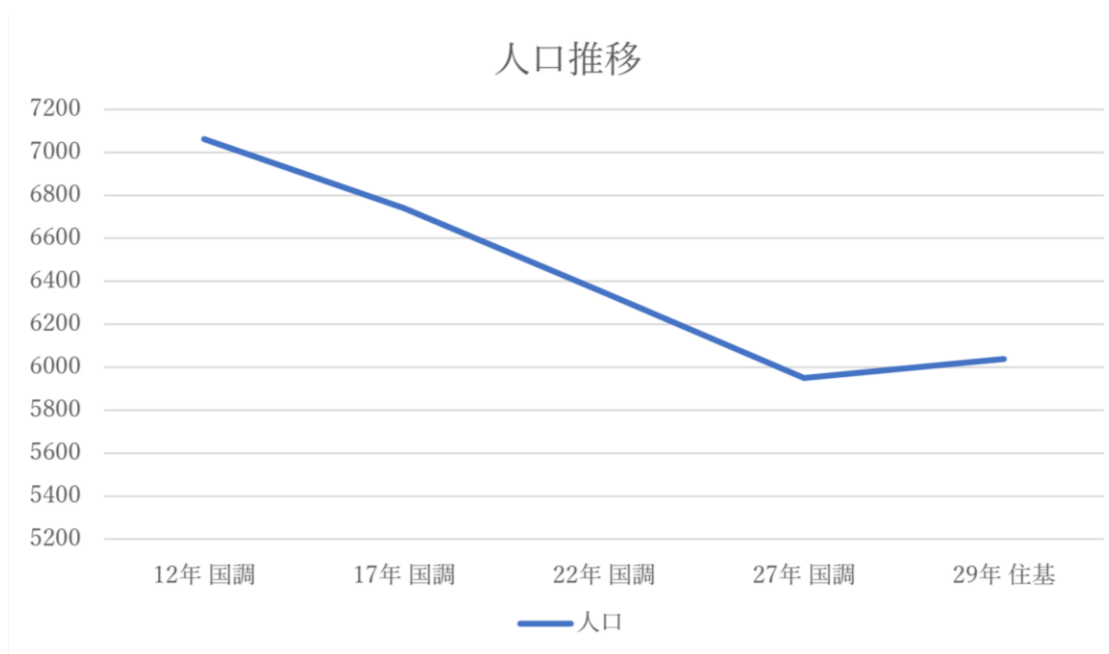
矢祭町は、2001 年に、町議会で「市町村合併しない矢祭町宣言」(以下、「合併しない宣言」と記す)が決議されたことによって全国的に名の馳せた町となった。矢祭町が合併しない理由として、以下の二つが挙げられる。一つ目は地理的条件である。矢祭町が周辺の町村と合併した場合、矢祭町は郊外地域になってしまう可能性が高い。そのため、合併により、自治体の規模が大きくなっても、その恩恵を等しく受けられるかについて、確実な保障は無いのである。

また、合併により誕生した自治体は、数字だけ見れば都市に匹敵するものとなるが、その実情は、町村役場周辺が発達するだけに止まり、都市機能が新自治体全体に行き届くことは難しいと考えられる。二つ目は過去の合併が要因となっている点である。矢祭町は、昭和の大合併の際、合併に反対する地域住民が暴動を起こし、大変な騒ぎになった過去がある。したがって、矢祭町は、合併に伴うメリットよりも、デメリットのほうが大きいという印象を持っているのである。

合併しない宣言から 6 年後の 2007 年に、矢祭もったいない図書館が開館した。これによって合併しない宣言で全国からの注目を浴びた矢祭町が再度全国からの注目を浴びる機会となった。この図書館では蔵書のほぼ全てが全国から寄付を募って集まった寄贈図書で構築されている。運営に関しては、町民が運営委員会を組織し、ボランティア同然で運営を担っている。そして、矢祭もったいない図書館に登録している者のうち、三分の一が町外の者で占められており、矢祭もったいない図書館は矢祭町の観光資源の一つとなっている。

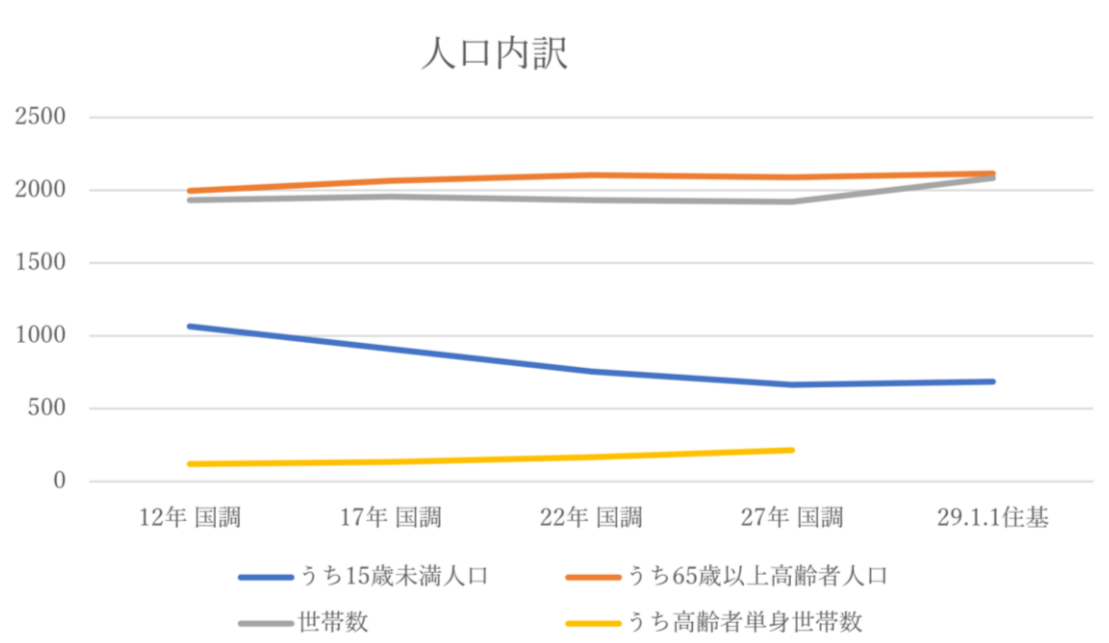
2-3 人口推移

平成 12 年から平成 27 年にかけて一転して矢祭町の人口は減少傾向にあったが、平成 27 年から平成 29 年にかけてはほぼ横ばいとなっている。下図参照。



(矢祭町資料より)

人口内訳について平成 12 年から 27 年にかけて、65 歳以上高齢者人口と高齢者単身世帯数については、ほぼ横ばいであるにも関わらず、15 歳未満人口は減少し続けている。このことから、矢祭町では少子化が大きな問題の一つであると言える。下図参照。



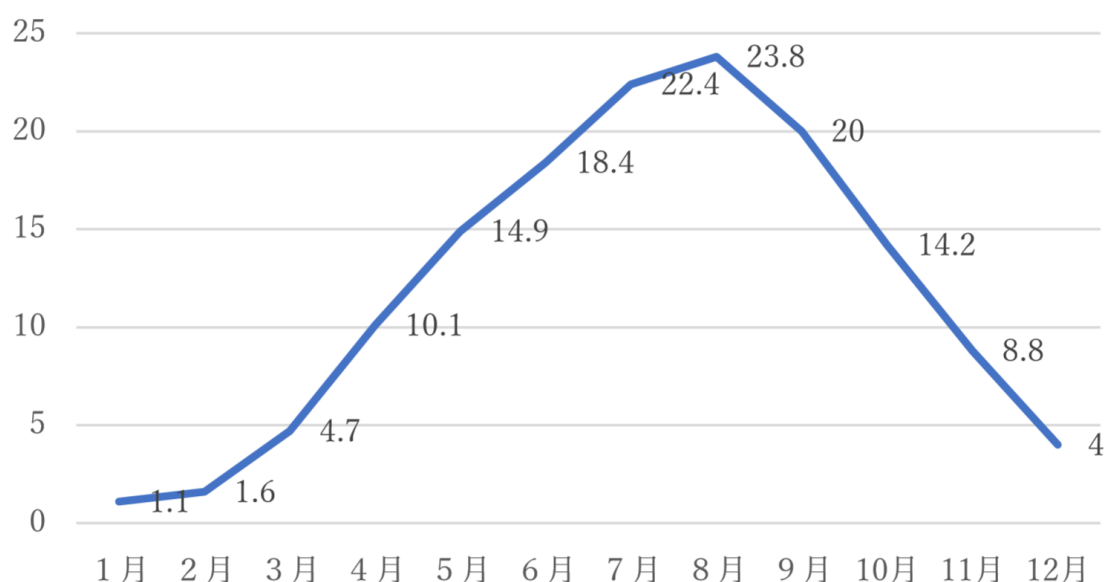
(矢祭町資料より)

2-4 位置・地勢

矢祭町は、福島県の最南端、東経 140 度 25 分、北緯 36 度 52 分に位置している。南は茨城県常陸太田氏・大子町、北は埴町に接し、主要都市までは、白河市へ 42km、日

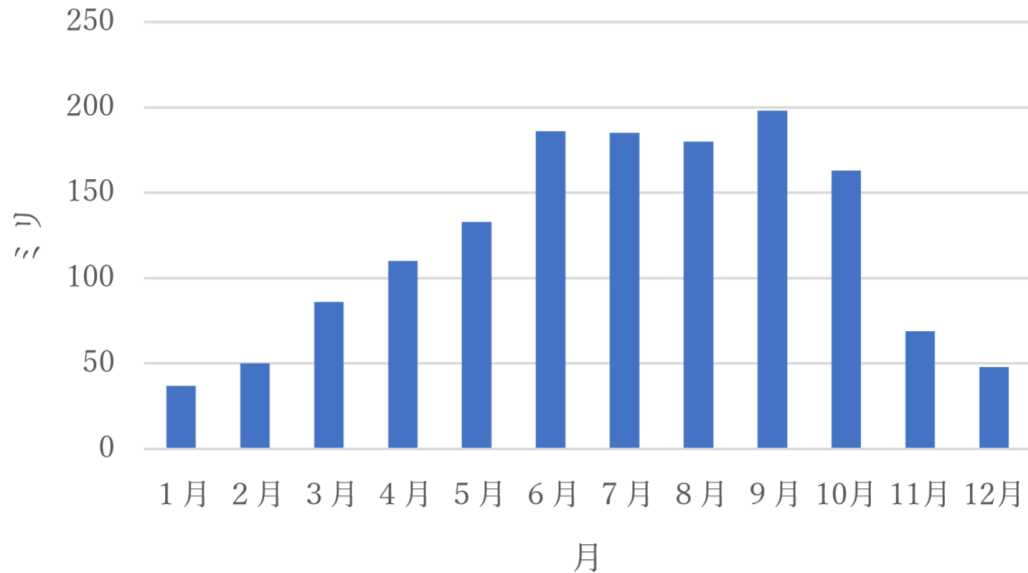
立市へ 48km、郡山市へ 70km、水戸市へ 74km、宇都宮市へ 82km、いわき市へ 90km、福島市へ 130km の距離にある。町域は東西 21.5km、南北 15.5km で面積は 118.27 km² を有し、東に阿武隈山系、西は八溝山系が分水嶺をなし、ここから発する支流は町の中央を南流する一級河川久慈川へと合流し、太平洋へと注ぎ込んでいる。久慈川流域に広がる標高 155～200m の平坦地域と阿武隈山系に属する標高 400～650m の山間地域に大別され、耕地率 6.6%、林野率 80.3%となっている。気候は太平洋側気候に属するため、比較的温暖で積雪は少なく、平均気温は平坦地域で 16°Cだが、山間地域では山岳気象の影響を受けることもあり 12°Cと冷涼である。また、年間降水量は 1200～1500 mm と森林や農作物の育成環境としては好条件といえる。

月別平均気温



(矢祭町資料より)

月別平均降水量



(矢祭町資料より)

2-5 特産品

矢祭町の特産品として、柚子、地酒、苺、蒟蒻、花卉、鮎の6種類が主に挙げられる。まず、柚子であるが、これはシャーベットなどに加工されたものも特産品として扱われている。次に苺であるが、矢祭町では「とちおとめ」と「ふくはるか」の2品種が栽培されており、その生産量は県南地方トップ、県内でも2位の産地として知られている。さらに、蒟蒻であるが、かつて「こんにやくの里」と称されるほどその栽培は有名であり、刺身こんにやくなどの料理も楽しむことができる。また、花卉は農業生産物の中で最も生産額が高く、全国トップの生産技術を有している。北は岩手県、南は広島県という全国各地に出荷しており、矢祭町農業の中核を担っている。そして、久慈川の鮎である。久慈川は延長124km、八溝山の山麓を源とし、鮎釣りのメッカとして名を馳せる。清涼のため質の高い苔が繁殖し、それを食べて成長する鮎は味も姿も日本一といわれている。矢祭山公園付近の通りに軒を連ねる旅館や飲食店で、鮎の塩焼きを堪能することが出来る。

3 廃校利用の先行事例調査

廃校の利活用については全国で様々な形で進められている。3-1～3-3はゼミ学生が直接訪問して視察した廃校利用例について報告を記している。3-4と3-5については、学校プールを利用した興味深い事例についてインターネットや文献調査を行ったものを示している。なお、これらは2019（令和元）年6月合宿の際に内川区の方々に対して廃校利用例として紹介した内容をまとめたものである。

3-1 アーツ千代田 3331（東京都千代田区外神田）

アーツ千代田は、旧連成中学校を再利用して開館したアートセンターである。施設は下1階～地上三階をアートギャラリーやオフィス、カフェとして利用しているほか、屋上は野菜等の農作物を栽培する農園となっている。また、文化活動の拠点として、展覧会や講習会、ワークショップなどが開催されている。館内は白を基調とした色が用いられており、外装は中学校そのままであるが、館内は美術館のような芸術性が感じられた。バリアフリーや防災情報といった公共性の高い設備も設けられており、老若男女問わず、様々な人が利用しやすい施設となっている。まず、バリアフリーであるが、エントランスにはスロープが設置されているほか、地下一階～屋上を通過するエレベーター、だれでもトイレ、おむつ交換台、授乳スペース、車いすの貸し出し、筆談や介護犬の同伴が可能な点が挙げられる。次に、防災情報であるが、これは液晶ディスプレイに地域の天気や風、波の予報などが放映され、地域住民をはじめとした人々に防災情報を提供していた。

さらに教室の再利用であるが、教室の壁を除去し、入室しやすいドアを新設するなど当時の教室の間取りは利用しつつ、美術館としての芸術性、公共施設としてのバリアフリー化を採用している形となっていた。本施設において旧内川小学校をする際に参考になる点はないかと模索したところ、主に2点が考えられる。まず1点目はバリアフリー化である。内川地区でも高齢化が進んでおり、公共施設として再利用するためには、バリアフリー化が必須と考えられる。そこで、エントランスにスロープを採用したり、教室の出入り口の段差を除去するなど「足元に気を使った改装」が特に有効的な対策であると考えられる。他にも、教室やトイレのドアをわずかな力でも開閉できればと考える。2点目は防災情報の発信である。やはり、地域の拠点となる公共施設には、防災機能を備えていることが期待されよう。そこで、アーツ千代田に設置されていたような「防災情報ディスプレイ」を設置し、天気予報や花粉情報のほか、PM2.5や放射線量、地域のイベント情報なども発信することが出来れば、公共性だけでなく、地域の交流なども促せるのではないだろうか。

以上がアーツ千代田を視察して得た知見と旧内川小学校への応用活用案である。

3-2 東京おもちゃ美術館（東京都新宿区四谷）

1984年、東京・中野にある芸術教育研究所の附属施設として東京おもちゃ美術館が開

館した。その後、2008年4月20日に旧新宿区立四谷第四小学校に移転し、「一口館長制度」に基づくお金の寄付と、ボランティアスタッフである「おもちゃ学芸員」の時間の寄付により成り立つ「市民立」のミュージアムとして運営されている。東京おもちゃ美術館は、「あそぶ・つくる・であう」という3つの機能を軸に、「親子で遊ぶ美術館」・「文化を伝える美術館」・「世代を繋ぐ美術館」として成立している。

0～2歳の乳幼児限定の部屋である「赤ちゃん木育ひろば」や、九州山地のヒノキ材を敷き詰め、木の香り漂う癒しの空間である「おもちゃのもり」、国際的な人気を誇るテーブルサッカーなどの多種多様なボードゲームが集まった「ゲームのへや」などのように、0歳から100歳まで多世代の人々がおもちゃを媒介し、自然と楽しいコミュニケーションがとれる「老若男女共同」の環境を提供している。また、人が遊びを通して五感を磨き、コミュニケーション能力を養い、夢を育てることの手助けとなるよいおもちゃ(グッドトイ)の展示も行なっている。

現在、グローバル化の影響により、外国人観光客が増加している。そのため、施設案内やホームページの多言語表記化などを促進している。また、顧客層の低年齢化が進んでいるため、年齢層を上げていくための工夫として、シニア割りやツアーの開催などを検討している。そして、おもちゃと遊びの文化を全国に広めるため、その地域独自の自然と文化の魅力あふれる姉妹おもちゃ美術館を全国に設立している。2018年には山口県長門市の「長門おもちゃ美術館」と秋田県由利本荘市の「烏海山 木のおもちゃ美術館」の2つが新たにオープンした。

この旧四谷第四小学校は地域の寄付によってドイツの建築家が設計した校舎であり、奇跡的に戦災を免れた歴史的建築遺産でもある。小学校としての役割を終えた空間は赤ちゃんからお年寄りまで多世代を繋ぎ、よいおもちゃに触れながら豊かな出会いと楽しさを創出する空間として活用されている。懐かしさを感じる小学校校舎に一步足を踏み入れると、そこにはふれあいの場としてのおもちゃの世界が広がっており、多世代の人々の笑顔で楽しむ様子が見られた。

3-3 別俣農村工房「田舎の学校 きらら」 (新潟県柏崎市別俣地区)

旧柏崎市立別俣小学校は1873年に開校したが、少子化の影響により児童数が激減したこともあって、2005年には小学校としての役目を終え、閉校となった。その後、唯一残された木造校舎の存廃に対して教育委員会からは維持管理にかかる財政負担の面などから一貫して校舎の解体・撤去の方針が出されていた。しかし、「観光名所や旧跡もない別俣にはせめて木造校舎をふるさとのシンボルとして次世代に残したい」という地元有志の「別俣を考える会」により、合意形成に向けた行政や議会に対する校舎存続の訴えや集落への説明会などが繰り返し行なわれ、協議会長宛の「念書」まで書かれた。

こうした地道な努力の結果、閉校から1年後の2006年に別俣農村工房が設立された。そして用途変更による約4ヶ月の改修工事を経て、2008年4月に農村体験交流施設「田

舎の学校「きらら」の開校を迎え、現在に至っている。別俣農村工房は、任意団体による運営で、行政の介入は一切なく無償譲渡による形式によって成立している。工房は 2000 年から継続している「田んぼの分校」と連携し、食・農・自然体験の 3 つの柱に、地元内外の親子を対象とした通年プログラムに取り組んでいる。食体験では、蕎麦打ちや味噌づくり、農業体験では米づくりを中心としたプログラム、自然体験では農耕儀礼の 1 つである稲虫送りやスノーフェスティバルなど 30 種類以上の体験メニューを用意している。また、最近から「学校へ行こう ノスタルジックツアー」を開始し、懐かしい小学校時代の一日の授業活動を味わうことができるプログラムにより、運営基盤の安定化を図っている。さらに、披露宴や「きらら星空音楽祭」の開催など独特な廃校活用をしている点も魅力的である。現状の課題としては、通年プログラムを通じて実施している様々な交流体験で得ている利益だけでは、運営資金の確保を賄えていない点が挙げられる。工房では開校当初から「イベントオーナー制」を導入して、オーナーには年会費 1 万円で工房のイベント 6 回の参加費が無料となるオーナー証を発行し、秋にはコシヒカリや手作り味噌などの 100%別俣産のプレゼントなどが贈られている。このようなオーナーが継続して別俣地区に関わることができ、さらに新規のオーナーやイベント参加者を増やしていくことができるようにするために、別俣を「ふるさと」として残していきたいと思わせる、地域住民の活躍の場の確保と安心できる生活環境を創出していくことが求められる。

また、農山漁村の中で培われた暮らしの知恵や技をもつ指導者である「なりわいの匠」が別俣地区には柏崎市の 4 割を占めている。少子高齢化の現状を踏まえ、匠の技を絶やさずに次世代に伝承していくためにも後継者の育成は重要な課題となっている。小学校としての役割を終えた空間が、現在は地域の根として世代を超えて農村文化を伝承する場として活用されている。今回のヒアリングを通じて職員の方々は次のような熱い思いを語ってくださった。「現在、若者の地方帰還を求めるのは非現実的である。高齢者が中心となって活動の場を維持管理していくことで、自らの生きがいにもなるし、そういった姿勢を若者にも見せていきたい。」少子高齢化の現状を踏まえ、今後の地方自治について模索するならば、別俣地区の地域住民の方々のように地域に対する愛着や誇りをもち、限られた地域資源を有効に活用できる情熱を抱いた人々がその担い手として活躍できるのではないだろうか。

3-4 むろと廃校水族館（高知県室戸市室戸岬町）

2018 年 4 月に「むろと廃校水族館」（高知県室戸市室戸岬町旧椎名小学校）が開館した。むろと廃校水族館では、小型海水魚から大型海水魚（ブリやサバ）、サメ、ウミガメなどが飼育されている。これらの生物は定置網にかかり保護された個体も含まれている。館内（旧校舎内）は多数の水槽が並べられているほか、資料展示室や研修室など様々な部屋が設けられている。また、小学校当時使用されていた机や椅子も展示台などに利用されており、水族館の中にも旧小学校を感じる事が出来る。さらに、屋外にある 25m プールは屋外展示水槽として活用されており、サメやウミガメなどの大型海洋生物が飼育・展示されている。

3-5 温泉トラフグ（株式会社夢創造）（栃木県那珂川町）

株式会社夢創造は、旧武茂小学校（栃木県那珂川町）のプールを再利用し、温泉トラフグの養殖を行っている。そもそもトラフグは海洋生物であり、その飼育には海水が必要である。しかし、栃木県は海に面していない県である。そこで目を付けたのが温泉である。那珂川町小川地区から温泉が湧出しており、その塩分濃度が生理食塩水に近い濃度であることから、山間部でも温泉水を利用することにより、トラフグを養殖することが可能なのである。また、フグには毒があるが、フグ自身毒を生成することは出来ず、海中に生息する貝やヒトデ、藻類など、毒をもっている生物を食べることで、毒を取り出し、蓄えているのである。つまり、人工養殖することで、フグに毒を蓄えさせずに養殖することが可能となり、毒をもたないフグを生産することが出来るのである。このように、地形的に不可能な事業でも、既存の施設や環境を利用することで、可能となる場合があるのである。



↳アーツ千代田外観



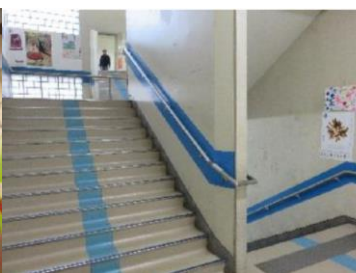
↳アーツ千代田情報 DP



↳東京おもちゃ美術館外観



↳アーツ千代田内観



↳アーツ千代田階段



↳東京おもちゃ美術館内観



↳別俣小学校 廊下



↳別俣小学校 教室



↳別俣小学校 内観1



↳別俣小学校 内観 2



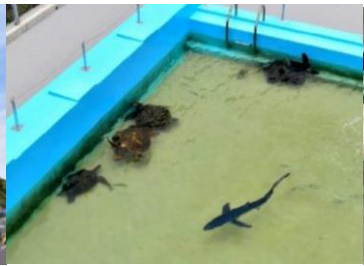
↳別俣小学校 階段



↳ 別俣小学校 外観



↳むろと廃校水族館²↳



むろと廃校水族館³ ↳温泉トラフグ (日経新聞)



² 高知家の OO 2018/4/19 「高知・室戸の新たな観光スポット！小学校をリノベした「むろと廃校水族館」に行ってみた」

(<https://www.kochike.pref.kochi.lg.jp/~top/matome/>) 2020年1月20日アクセス

³ 『朝日新聞』「むろと廃校水族館がオープン」 2018/4/27 03時00分

(<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20180611002386.html>)

4 前年度事前調査活動

4-1 第一回現地活動調査(2019.3)

4-1-1 活動内容

2019（平成31）年3月17日から18日にかけて実施された矢祭町現地調査では、主に農業体験・農泊体験・東京その他地域の廃校利用例の発表・内川地区の方々と一緒に旧内川小学校の校舎の掃除を行った。

3月17日には主に農業体験を行い矢祭町の方と交流を深めた。4つの班に分かれ、清流の里協議会の方の指導のもと農業体験を行った。内容は①炭焼き②茗荷の肥料蒔き③米の苗の準備④柿の木の剪定/まきわり体験である。

- ① 炭焼き体験では、バーベキューや魚を焼くときに主に使われる黒炭を作る作業を体験した。窯を使い炭焼きを行っているところは全国でも珍しく貴重な体験となった。
- ② みょうがの肥料まき体験では、みょうがの根元に粉粒体の肥料を手作業で蒔いたのち、鍬を使い土をかぶせる作業を行った。また、休憩時間には畑のあぜ道にごぎを引きお話をしながら矢祭の特産物であるゆずなどをいただいた。
- ③ 米の苗の準備では田植え前の時期にハウスで米の苗を育てるために農業で使われるポットに土を入れ種を入れる作業を行った。全国的に田植えや稲刈りは体験できることが多いが、芽が出るまでの作業はとても貴重な体験となった。
- ④ 柿の木の剪定/まきわり体験ではそのような作業に初めて体験するメンバーが多くより密接に矢祭町の方と交流できた。また、途中に①の炭制作の様子を視察し貴重な体験となった。



炭焼き体験準備



まき割り体験

3月18日には矢祭町清流の里協議会の方にスライドを使用しながら実際に東京都千代田区にある廃校となった千代田区立練成中学校を改修しオープンしたアーツ千代田3331や廃校となった東京都新宿区立四谷小学校の校舎を利用した東京おもちゃ美術館を訪れ、

運営状況・廃校ののちどのように利用されるようになったか・校舎の様子など、全国の廃校利用し運営している施設を加えプレゼンテーションした。

その後旧内川小学校をゼミ生・清流の里協議会のメンバーと訪れ、実際に掃除をしながら校舎をまわった。

4-1-2 活動・調査で分かったこと

実際に旧内川小学校を訪れ、掃除を行うことにより校舎の広さや教室の数、理科室や家庭科室など特別教室の配置場所、小学校から見える風景などをより詳しく知ることができた。また、旧校舎の耐震の状況が必ずしも高くないということについても初めて小学校に行き、知ることができた。清流の里協議会の方を含めた矢祭地区の方々と共同で掃除をすることによりコミュニケーションをとり内川地区がどんな地域なのか、どんな小学校だったのかなど思い出を聞くことができた。

班に分かれて行った農業体験ではそれぞれの班が普段できない体験ができた。その農業体験から矢祭町ではどんな作物を育てているのか、気候状況、林業等が盛んであることを把握することが出来た。

3月の現地調査では初めての矢祭町訪問となったメンバーもいた。そのため、写真や文献等の資料ではわからない矢祭町、特に旧内川小学校のある内川地区の自然に囲まれている状況また、車の通り具合や外を歩く人の人数や様子など内川地区の普段の実際の状況を知ることができた。

東京都内その他地域の廃校校舎利用のプレゼンテーションについては地元地域の方々が、旧内川小学校がどのように生まれ変わってほしいのか・どういった施設は賛成できないのか、などがプレゼンテーションに対するリアクションから考えるきっかけとなった。



内川地区の方々と一緒に行った旧内川小学校の掃除の様子

4-1-3 課題

今回の現地調査では内川地区のみを調査するような形となった。そのため、矢祭町全体がどんな街なのか・矢祭町に住む方々は普段どこに買い物に行くのか・他の地域とはどのくら

い離れているのか・駅などはどこにあるのか。などの地理的なもの・生活圏などは理解することができなかった。今後の内川地区の活性化・廃校利用プランの作成にあたって、矢祭町全体の施設や周辺地域との関係性などを考察していく必要があることがわかった。

また、清流の里協議会の方と学生はほぼ初対面であり、アイスブレイクはできたが踏み込んだ矢祭町の状況・どのように再利用を進めていきたいのかという話を聞くことはできなかった。内川地区に住む清流の里協議会の方にしか今回はほとんど話を聞けておらず、矢祭町の中の内川地区以外の地区の方々・清流の里協議会に所属していない内川地区の方々は旧打川小学校の廃校利用に対してどのように感じ考えているのかを知ることができなかった。今後の現地調査では矢祭町全体の地理的状況を知ること、またどのように廃校利用を進めていきたいかなど清流の里協議会の方々のメンバー以外の地区住民や関係者にも聞き取り調査をする必要があると感じた。

旧内川小学校の耐震状況等については把握しきれておらず、現状を知ることができたが、減築するか、耐震補強の工事をするかという課題が分かりそれをふまえた廃校小学校の利用案を住民に提案しなければならないと感じた。

5 2019（平成 31・令和元）年調査概要の報告

5-1 第二回活動調査(2019.6)

5-1-1 活動内容

6月15日から16日にかけて実施された箕輪ゼミの福島県矢祭町における活動として、主にもったいない図書館の視察、内川地区の聞き取り調査、農泊、矢祭山クリーン&ハイキングへの参加、農業体験、シャインマスカットの生産を始めた農業者からの話を伺った。

まず6月15日には、全国各地からの寄贈図書のみで開館されたことで有名な「もったいない図書館」に行き、現在では47万冊もの管理されている本など、建物内を拝見した。次に、班ごとに分かれ清流の里協議会の方々に案内してもらい、町民の方々の矢祭町の歴史や住んでいて思うこと、旧内川小学校の再利用等に関する聞き取り調査を行った。また、夜間には、農泊にて各家庭の方と親睦を深めることで聞き取り調査では聞けなかった、再利用に関するさらに深い意見についても聞くことができた。

6月16日には、矢祭山公園で行われるクリーン&ハイキングに参加した。矢祭山をハイキングして自然と触れ合うと同時に、ゴミを拾うことで矢祭山を少しでもきれいにすることができた。矢祭山クリーン&ハイキングを行う中で、今まで資料の中でしか見たことのない矢祭町のことを直接感じることができた。前回の合宿で行くことができなかった矢祭山の散策をしながら、落ちているゴミを拾うお手伝いがあった。その際、住民の方々と歩き、聞き取り調査では伺えなかった方々と交流を持ち、現在の矢祭町について等伺うことができた。また、矢祭町の特産品である「ゆずシャーベット」や「あゆ」の塩焼きも食べた。その後、農業体験を行った。農業体験では、清流の里協会の方々に教わりながら、内川小学校グラウンドの草刈りと花の植え付け体験を行った。



矢祭山クリーン&ハイキングの様子



ゆずシャーベット

5-1-2 活動・調査で分かったこと

2019（平成 31・令和元）年となり、2 度目の調査合宿で直接町民にインタビューを行うことができ、前回の調査合宿では知り得なかった、町民側の意見やニーズについて理解することができた。

まず、福島県矢祭町の地域特徴として分かったことは、人との距離感が近く自然が豊かであるという魅力があるが、交通の便が悪く、人に移り住んでもらいたくても働く場所も少ないという問題点があることを知った。また、学校や遊ぶ場所が少なく、教育環境において子供の将来が心配であるという意見もあった。

また、「旧内川小学校をどんな施設にしてほしいか？」という質問に対しては、「自然豊かな町だからそれを活かしてほしい」、「風化しない持続可能な人が集まる施設へ」、「長期的に移住の意志を持った、若い人に移住してきてほしい」などの意見が多かった。どの町民にも共通していえることは、若い人の手を借りて内川小学校を利用して地域を活性化させたい想いであった。この想いに応えられるよう、私達学生がニーズに合った旧内川小学校の再利用案について考えていこうと強く感じた。

矢祭山クリーン&ハイキングでは、思ったよりも子ども連れの家族での参加者が多いように感じた。毎年参加しているという子どもから話を伺うと、矢祭山の道に詳しく、景色が良い場所等も教えてくれた。矢祭町の特産品であり、休憩スポットで出てくる「ゆずシャーベット」や最後に食べられる「あゆの塩焼き」等もとても楽しみにしているようであり、私達も食べてみるとその美味しさに感動した。そこから、ぜひこの商品を通じて矢祭町の宣伝も出来ないだろうかと考え、この後の 11 月 3 日、4 日の学園祭で「ゆずシャーベット」などを売ることを決定した。このことについては後の「白山祭活動報告」にて詳しく述べることとする。住民参加者や清流の里協会の方々とは歩く中で、聞き取り調査では行けなかった方々から話を伺うことができ、より距離感が縮まったように感じた。

最後に、清流の里協会の方々に教わりながら、男子は旧内川小学校グラウンドの草刈り、女子はひまわりの種等の花の植え付けを行う農業体験を行う中で、農業をして物を育てたり維持したりすることの大変さを実感した。



ぶどう生産についての話を聞くところ



植花体験

5-1-3 聞き取り調査結果の概要

4つの班に分かれ、聞き取り調査を行った際の報告は下の通りである。

まず、「①矢祭町に住んでいてどう思うか」と尋ねたところ、住んでいる人々は穏やかで近所付き合いが深く、自然が豊かであることが主に挙げられた。また、「②住んでいて困ること」としては、空き家が多いこと、商業施設や病院が少ないこと、高齢化や限界集落で今後が心配であること等があった。「③矢祭町を今後どうしたいか」については、若い人の移住者を増やし明るくしてほしいという意見が多かった。「④旧内川小学校の再利用についてどう思うか」については矢祭町の活性化のため、賛成という意見が多かった。「⑤旧内川小学校をどのように使いたいか」という質問については、宿泊施設や加工場といった外部向けの意見から、地域の方々が使えそうな公民館という意見もあった。どれにしても金銭面や運営面の問題は残っている。

今回の訪問調査ではあまり多くの世帯を回れなかったので幅広い年代の方の意見を聞くことは出来なかった。今後もこのような聞き取り調査を行い、賛成反対関係なくより多くの意見を聞くことが必要である。

5-1-4 課題・今後の展望

今回、自然と直接触れ合い、矢祭山クリーン&ハイキングや農業体験などを行う中で、今まで私達が住んでいる町とは違う魅力があり、違う問題点があることもわかった。直接町民に聞き取り調査を行うことで率直な意見を聞くことができ、大変参考になった。「ないものをつくる」というよりも、矢祭町にある自然や特産品等を活かすということも視野に入れることができた。今後は、町民のニーズに合わせた再生案を吟味し提案していきたい。また、今回聞き取り調査で伺った場所は年配の方が多かったため、子供連れの親子や幅広い年代の方々にも話を伺い、それぞれのニーズやどう思っているのか年代別で調査したい。さらに、ゆずシャーベットやあゆの塩焼きを食べとても美味しかったので、掲示板等をつくり SNS 等でも PR して矢祭町の宣伝をしていけたらと思う。

5-2 白山祭活動報告(2019.11)

5-2-1 活動内容

東洋大学箕輪ゼミでは、東洋大学の学園祭である白山祭において、矢祭町と連携して矢祭町の特産物であるゆずを加工したゆずシャーベットの販売、矢祭町物品販売、ゼミ活動報告、矢祭町・内川地区紹介を実施した。以下では、準備・打ち合わせ等を踏まえた当日までの活動内容について記載している。

【11/01(金) 矢祭町日帰り視察・打ち合わせ等】

10月12日未明に矢祭町を通過した台風19号の猛威によって、矢祭町では道路陥没や土砂崩れ、床上・床下浸水などの被害が生じた。特に久慈川に架かる高地原橋の流失は最も大きな被害となっており、国道118号と高地原地区を結ぶ唯一の通路が絶たれたことで、一時住民の方々が孤立状態となっていた。私たちは11/01(金)に矢祭町に足を運び、流失した高地原橋を始め、川岸の倒木や崩壊した「やな」等の台風19号による被害状況を写真で収め、ゼミ生や白山祭当日に来てくださるお客様に共有することを決めた。

午後からはまず、矢祭町役場において2日後に開催となる白山祭の詳細や12月に実施する調査合宿、次年度のゼミとしてのプロジェクト活動継続の依頼について役場職員の方と打ち合わせをした。その後は6次産業化で矢祭町の地域活性化を図っている茗荷地区にお住まいで増子さん宅(山のごちそう本舗 増子椎茸園)を訪問し、しいたけやゆずの加工品を購入して白山祭で販売することにした。また、増子さん宅のすぐ近くにあるゆずの栽培場所に移動して、ゆずの収穫体験をさせてもらった。鋭いトゲもあるため収穫の際には分厚い手袋をはめてしたが、初めて行なうゆずの収穫に笑顔で楽しんで行なうことができた。収穫したゆずの一部は白山祭の装飾品として使用することに決めた。最後にユールパル矢祭町で保存しておいてもらったゆずシャーベット120個を取りに行き、いよいよ前日準備を翌日に迎えることとなった。



台風19号で流失した高地原橋



ゆず収穫体験

【11/02(土) 白山祭前日準備】

昼の 12 時からスタートした準備では使用教室の始めからある汚れや傷等の確認を実施したあとに、教室内のレイアウトを大まかに決めて早速取りかかった。準備では店の看板作りや事前に作成しておいた矢祭町・内川地区のプロフィールポスター、矢祭町調査合宿の軌跡ポスターなどを貼る作業を協力して行なった。また、前日に写真で収めた台風 19 号による被害状況をポスターに新しくまとめて、来場者などに現在の矢祭町の状況を知ってもらえるような工夫をした。夕方には大体の準備を終えて、いよいよ白山祭当日での販売を残すのみとなった。

【11/03(日)~04(月) 白山祭当日】

当日は前日までに準備したものに加え、入り口付近にこれまでの矢祭町調査合宿を写真でまとめたスライドショーを随時流しておき、教室内でシャーベットを食べながら見てプロジェクト活動のイメージを掴んでもらうような工夫をした。販売場所が出店の集中するエリアではないので始めは来場者数が伸びなかった。しかし、地道な PR の成果や午後からの来場者の全体的な増加などもあって売り上げを急激に伸ばすことができた。1 日目はゆずシャーベット 88 個の売り上げを記録し、良いスタートを切ることができた。他にもサブ商品として販売していたゆずやシイタケの加工品などもいくつか売れており、当日矢祭町から来てくださった矢祭町清流の里協議会会長や役場の方も笑顔で見守ってくださった。

初日の売り上げが良すぎたこともあり、ゆずシャーベットの残りの販売個数が 32 個だったので 2 日目は販売開始時間を少しずらしてスタートした。ゼミ生の各サークル友達が多く来てくれたこともあり、14 時には販売予定数である 120 個を全て売り切ることができた。しかし、ゆずやシイタケの加工品といった矢祭町の物品販売は売り上げが思うように伸びず、売れ残りが多く出てしまうなどの反省点も出た。



白山祭で販売したゆずシャーベット



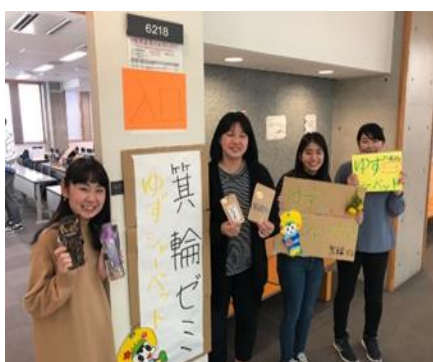
白山祭で販売した矢祭町の特産物加工品

5-2-2 打ち合わせ・準備、白山祭での販売を通じて分かったこと

白山祭の打ち合わせ等をするために日帰りで矢祭町を訪問した際には、台風 19 号に

よる被害の大きさが流失した高地原橋や崩壊した「やな」等から伝わってきた。尚、12月に実施した調査合宿において台風19号による被害として用水路に溜まった泥を除去する活動を協力して実施し、地域住民の方々と共に良い汗を流した。また、改めて矢祭町にはゆずだけでなくシイタケなどを始めとした魅力的な特産物がたくさんあり、それらを使用した6次産業化で地域活性化に励む情熱的な方もいるのだということを学ぶことができた。

白山祭当日では、ゆずシャーベットを購入する方々が多くいた一方で、しいたけや山椒、にんにく等を利用した矢祭町の特産物加工品の売り上げがあまり良くなく、購入者も若者ではなく年齢層が高い来場者に限られていた。また、全体的にゆずシャーベットのみを買って帰っているだけで、教室内に貼られているポスターに目を向けている人も少なかったような気がしている。役場の方々が用意して下さった矢祭町農泊推進パンフレットも取っていく人が必ずしも多くなかったので、より積極的にPRしていくべきであったところは反省点として挙げられる。しかし、準備から当日の運営までゼミ生で協力して実施することができたし、矢祭町を知らない方々に私たちの活動について発信する良い機会になったと感じている。



白山祭での販売所入口



白山祭で掲示した矢祭町と活動紹介ポスター

5-2-3 課題

思いの外、ゆずシャーベット120個を早い段階で売り切ることができたので、来年度以降はゆずシャーベットの販売個数と1日あたりの販売個数の上限を予め明確にしておくべきだと考えている。また、ゆずシャーベットは冷凍商品であるため、保存状態をいかにして溶かさずに維持して提供できるかが重要になる。来年度以降もクーラーボックス、保冷剤、研究室の冷凍庫の三つを上手く活用して、搬出のタイミングなどを話し合っておくべきだと考えている。

加えて、ゆずシャーベットや特産加工品などの商品が東京などでも十分魅力のあるものとして考えられる潜在性を確認する機会にもなった。そして、このような話を白山祭以後のゼミ合宿などで矢祭町の地域住民の方々に話をして、情報共有をすることができるようになったので、その点については評価できる。来年の白山祭では、今回の白山祭

同様、ゆずシャーベット販売に加え、矢祭町の特産物を利用した物品販売も継続して行なうべきだと考えている。しかし、顧客対象を年齢層の高い方々に絞るのではなく、若者にも矢祭町の魅力を伝えるために、集客方法について具体的な検討・工夫をしていくべきだと考えている。また、矢祭町の関係人口を増やして地域活性化に繋げていくためにも、白山祭だけでなく東京近郊において矢祭町を PR する活動を設定し、ゼミと矢祭町が連携して情報発信していくことも今後求められるのではないかと思う。

5-3 第三回活動調査(2019.12)

5-3-1 活動内容

今回、12月7日から8日にかけて実施された箕輪ゼミの福島県矢祭町における活動として、清流の里協会の方々とのこんにやく・蕎麦づくり、用水路・春日神社の清掃、こんにやくいも堀り、農泊・清流の里協議会の方々との親睦会、旧内川小学校再利用案のプレゼンテーション、フォトロケーションマップ作成のための実地散策の6つを行った。

はじめに12月7日の行程として、地元の名産であるこんにやくと蕎麦を原料から矢祭町で蕎麦打ちをしている方に加え清流の里協会の方の指導の下調理から実食まで行った。次に用水路・春日神社の清掃では台風19号の土砂被害によって堰きとめられた用水路や落枝した春日神社の清掃・撤去作業を清流の里協会の方々協力して行った。

こんにやくいも堀では、生産プロセスの説明を受けたことに加えて実際にこんにやくいも堀りを土地所有者の指導の下で行った。また、夜間には農泊各家庭の方や清流の里協会の方々との親睦会を開催し矢祭町における伝統行事など地元の現状などに関してさまざまな意見交換を行った。

次に12月8日の行程としては、はじめに旧内川小学校の再利用案に関して清流の里協会の方々に対して4班に別れ4つの意見を提案する形式でプレゼンテーションを行い、それに対してのフィードバックを清流の里協会の方々からいただいた。最後に、矢祭の台風19号におけるさまざまな被害の現状や発展性、観光資源などの発掘を目的としたフォトロケーションマップ作成のための資料収集を3班に分け清流の里協会の方々案内の下、各地区ごとの風景写真や名所また名所となりうるものに関する探索を行った。



用水路清掃後の集合写真



台風19号の爪痕

5-3-2 活動・調査で分かったこと

今回の調査活動は今年に入り 3 回目ではあったが、さまざまな側面からいったい何が矢祭町に必要であるかを学んだ。

1 日目のそばうち・こんにゃく作りでは、清流の里協会の方たちの力を借りながら普段できないような貴重な食体験ができたと言える。このことから、清流の里協会との交流も手助けして来年の学園祭の出し物のアイデアのヒントを得ることができたことに加えて、今回学園祭で出し物として出店したゆずシャーベットのほかに新たな選択肢としてそば、こんにゃくの選択肢も新たに増えたもといえる。また、用水路・春日神社清掃をおこなったが、前者では台風の影響で重たい土砂や石が堆積しておりそれを掻き揚げるのに大変労力のいる作業であった。後者では、同じく台風の影響で木の枝が散乱していた。私たち学生でも大変な作業であったが、これを高齢の方が、しかも 5 人未満で行うのは無理があり、地域コミュニティにおけるマンパワーの不足を実感した。

つづいてこんにゃくいも堀りを行った。矢祭町で伝統産業のひとつであるこんにゃくいも堀りを通して収穫時期が白山祭の時期にも重なり、コネクションもあることからこれも活用できるのでないかと感じた。

夜の懇親会では、清流の里協会の方たちから矢祭町の伝統行事や祭りについて聞き、地域コミュニティの規模の縮小が伝統行事の縮小につながっていることが感じられた。地域復興に関して当日の清掃作業で実感していたこともあり、いかに人を増やすか、とどまらせるかに関しても考察の必要性を感じた。

二日目では、はじめに旧内川小学校の再利用案を清流の里協会の方々に対して 4 班に別れ 4 つの意見を提案する形式でプレゼンテーションを行い、それに対してのフィードバックをいただいた。さまざまな案を発表したが、中でも反応がよかったものとして、旧内川小学校における植林体験と平行したビオトープの創生が挙げられた。もともと矢祭町は林業が盛んであったという地理的歴史的背景があり、このことから本意見が生まれたものと考えられる。また清流の里協会の古市会長は旧内川小学校を宿泊施設かすることを考えていることなども今回の調査からわかった。

最後に敢行したフォトロケーションマップ作成のための観光資源やそれらになりうるものに関しての現地情報収集において旧内川小学校近辺、不動滝近辺、高地原近辺を 3 班に分かれ散策や資料写真の収集などを行った。本調査から、実質的観光資源となりうる素材自体は桜やゆず、そばやこんにゃくづくり、農村体験、透き通った河川、荘厳な滝、ジブリ作品などに出るかのような山中の寺社仏閣に続く道などがあったが、観光資源としての活用がない原石の状態であると言及可能である。このことから、活用のための方策や提案をより考えていくことの必要性を感じた。

5-3-3 課題

今回の調査を通して、はじめに矢祭町の人口減少や高齢化問題などから生じるマンパワー不足の問題を実感した。今回の用水路・春日神社の清掃では、東洋大学の学生が協力することで、かなりスムーズに完了することができたと地域の皆さんからお声かけいただいたが、実際はあくまで住民ではない、関係者として矢祭町に携わる関係人口である我々が抜けた場合、基本的に活動を行うのは地元住民や清流の里協会のメンバーによるものが主軸となる。このことが作業効率を実質的に低下させることとなり、個人が活動に費やせる力の効率自体が低下、分散することで、地域振興も鈍化してしまうことが考えられる。

次に、観光資源に関する課題としてはフォトロケーションマッピングでの調査で清流や鮎つり、寺社の存在、こんにゃく、そば、ゆず、鮎など場所や食に関してさまざまな観光資源の存在や発見が達成できたが、その活用や運用また宣伝の仕方などに関しては往々にして月並みであるのが現状であり、それらに関してのより費用対効果の出る宣伝方法・解決策などに関しての提案や考察が必要であると考えられる。

最後に、上記したとおり矢祭町自体は食・場所ともに観光資源自体は存在することを考えて、我々箕輪ゼミがより大きな関わりとして提案できることは、新しい価値観の創生や提案に重きを置くことが重要であると考えられ、今回の調査活動における旧内川小学校に関するプレゼンテーション内でも SNS による情報発信や VR 技術を使ったユニークで先進的な再利用に関しての意見提案が出たことから結びとして我々箕輪ゼミが矢祭町地域振興においてより新しいシステムや提案を敢行することが命題であると考えられる。

※フォトロケーションマップ3つ

6 福島矢祭町内川地区旧内川小学校再利用案

箕輪ゼミではこれまでの調査をもとに 4 つの班に分かれて今後の旧内川小学校の再利用案を考えた。現時点では、資金面での目途をはじめとして今後の統一的な方向性が決まっている状態ではないため、ここでは 4 つの班それぞれの提案内容を提示していくこととする。

6-1 アベンジャーズ班 (吉田・豊巻・笠戸・加藤萌・森) 提案内容

「ゆずを使用した特産物加工工場 (ゆずファクトリー)」を提案する。また、加工工場だけではなく、ゆずなど矢祭町の特産物について楽しく学べる教室や簡単な加工品を実際に作る体験をできるように考えている。他にも、カフェの併設も考えている。加工工場を作ることで矢祭町の特産物であるゆず商品をブランド化にすることができると考えている。商品の一つとして考えているのは、「ゆずふる」という振って変化する食感を楽しめるゆずの果肉入りゼリードリンクである。ゼリーなため器に注ぎ凍らせることでシャーベットとしても食べることができる。11月に行われた白山祭にて箕輪ゼミでは、ゆずシャーベットを販売し大人気で完売したため、ゆずのスイーツや飲み物は期待できる。他にも、調味料系などその他ゆずを使用した食品を作っていく。

(建物のイメージ)

- 体育館…ゆずの加工製品、その他の特産物の販売をできる場として利用する。使用しなくなった跳び箱等の体育館にある用品をイスやテーブルに再利用する。少しでも旧内川小学校にあるものを再利用することでコストを削減することができ、廃校を利用していることが利用者に伝わると考える。残りのスペースには、休憩をする場所やくつろげる場所を作る。またカフェも併設する。体育館の外側にも少しはみだしデッキ席を作ることで矢祭町の自然を感じるができる。
- 校舎…1階部分は、加工場や実際に加工品などを作る体験ができる場所にする。2階部分は、ゆずなどの材料や出来上がった加工製品の保管所にする。また、空いている教室では学びの場として利用する。

(学びの場というのは…)

1. ゆずの栽培に関する詳細などの説明や、様々なゆずの紹介するプログラムである。例えば、食べるゆずだけではなく、アーティストのゆずなど広くゆずに関することを聞ける場にする。ゆずの栽培や種類だけを学べる場にしてもいいのだが、楽しく学べることを目的としているため、アーティストのゆずなどの紹介もしていったら面白そうだと考える。
2. VRを使用したゆず畑の散策を体験できるようにする。VRというのは、テレビや大型スクリーンとは違い、あたかも自分がその空間にいるような感覚を感じ

ることができるため VR を使用することでさらに面白い学べる場になると期待できる。さらに VR を使用することで障害を持つ方々ができないことが可能になる。

3. また、家庭でのあらゆる活用方法をレクチャーする。矢祭町の方々はゆずを使用した料理の知識は豊富なため、ためになる知識を得ることができる。食用だけでなく、生活用としての使い方も知ることができる場にする。最後に試食する時間を設ける。(生のゆずや加工されたゆず、ゆず茶など)

6-1-2 内川小学校再利用にあたっての課題

(1) 内川小学校校舎について

内川小学校についての住民の意見は、通っていた年代と全く通っていない年代がいるためそのまま残してほしい方と残さなくてもいいという必ずしも一致していないことが調査から把握することが出来た。例えば、「学校は地域発展の鍵になる場所なため活用したい。」「校舎が現在のものではないため思い出がない。」などという意見があった。そのため、内川小学校に対する価値観は変わってしまう。内川小学校の一番の課題は耐震性である。内川小学校は3階建てであり、3階まで使うならば補強工事をしなければならない。3階を使わないならば、減築工事をしなければならない。補強又は減築にどれほどの費用が必要で、その費用の財源の調達が課題である。耐震性以外にも消防法など使用するのに法律の問題も出てくる。体育館は地域の方々の健康診断場所として使用されている。校庭やプールの用途も考えていかなければならない。

(2) 運営主体について

運営主体は廃校利用での大きな問題の一つである。まず考えられるのが地域の有志の方々である。内川小学校の廃校利用にとっても熱心な方は引き受けていただけると思うが現実的には負担が大きすぎてしまう。なぜなら、高齢化での地域を維持する諸活動の担い手が不足しているからである。矢祭もったいない図書館の時はボランティアでうまくいったが今回もそのようなボランティアの方が名乗りを上げてくれるのかが不明瞭である。次に、矢祭町の HP や広報誌のやまつりなどで呼びかけることや、東京で行われているもったいない市場など矢祭町の外でチラシを配ったりして募集する。また、矢祭町に既にある加工工場と連携をしていく。既にあるゆずの加工工場と連携することでゆずの出荷量や生産性を向上が期待できる。ゆずの知識など多くの知識を持っているため連携することにより、新たな良いものが生み出せると考える。最後にやまつりまち・ひと・みらい協議会のゆず部門の方々と協力する。ゆず部門の方々は加工品も作っているため、既存するゆずの加工工場と同様に協力することができれば新たな良いものが生み出せると考える。また、運営の主体が行政メインなのか地域がメインなのかにより、利益重視のビジネス目的か地域活性化かが変わってくる。行政が運営の主体になってくると、その時の町政の財源などで変わってくる。

地域メインが運営の主体になってくると、地域活性化が目的となる。しかし、行政に比べて運営資金の確保や負担、維持費などが大きな問題である。

6-1-3 採用後の予想されうる問題点

(1) メリット

一つ目はゆずファクトリーを作ることにより、若者の働く場所ができるため矢祭町へ移住してもらう。そのため、矢祭町から出ていく人を減らして、矢祭町の課題である人口減少や若者の減少を少しでも食い止めることができる。そして、体育館に作ろうとしているカフェやくつろげるスペースを地域交流の場として利用することができる。二つ目は、ゆずを今まで以上に特産物として認知されることである。矢祭町のマスコットキャラクターであるやまっぴーもゆずをモチーフにしている、矢祭町役場もやまっぴーを推していると思うので、ゆずを使った加工品を作ること町外の方にも特産物として認知され、ゆずの魅力を全国へ発信していく。三つ目は、経済活動の場となることである。四つ目は、集客の増加を促進することができる。ゆずファクトリーでは加工工場と学びの場を考えているためただの加工工場とは違う。矢祭町ならではの加工品を開発し、学びの場で矢祭町のことやゆずの知識を得る機会、製作体験や工場見学など普段体験できないことを実施することで矢祭町外の人たちの集客が増加すると考える。ゆずファクトリーを作ること、経済的にも矢祭町が潤い、人口減少や新たな働き場として利用し、地域の活性化へと繋がると考える。

(2) デメリット

運営の主体、加工品を作るための機械や商品となるゆずの確保が問題である。ゆずは自体実っているものの収穫する人がいないのが問題である。また、どれだけ出荷してもらえるのかもまだ不明瞭である。次に、運営費や維持費、工事費の調達である。加工するための機械の購入や機械のメンテナンス費用、減築にかかる費用、働き手の給与などの様々な費用面である。内川小学校までのアクセスがあまりよくない点である。最後に、現地販売のみで大きな売りに繋がるのかが問題である。インターネット販売や SNS などを使い積極的に情報を発信していかなければ大きな売りに繋がらない。売りに繋げるためには、東洋大学の生協に置いてもらう。やまつりもったいない市場など矢祭町の外でも売っていかなければならない。

6-2 カンガルー班(加藤佑佳 笹井春花 原田翔太 三田大貴)提案内容

6-2-1 提案概要

私たちは今までの調査を通して、子どもの遊ぶ場所が少ないことと自然の豊かさが生んだ豊富な木材が活かされていないことに問題があると考えた。これらの問題点を踏まえ、以下の4点を目的として「矢祭町の木材を活かした公園」を提案したい。

1. 再び子どもの声が聞こえる町（学校）にすること。
2. 矢祭町の人々が学びの場・交流の場としてりようできる施設にすること。
3. 娯楽施設として、のびのびと遊べる憩いの場を提供したい。
4. 木の魅力を伝え、木との触れ合いを大切に、日本の木や山を取り巻く環境への理解を深めるため。

(公園のイメージ)

○校庭→半分には町の豊富な木材で造った木製遊具を設置し、もう半分は何も設置せずに広場にする。

- (1) 矢祭にあるたくさんの木材を使用しすべり台、シーソー、ブランコなどの木造の遊具を作る。

→矢祭町は昔林業が盛んであり、町の約8割を木に囲まれている。その木材を上手く利用する。

- (2) 校庭の半分のスペースは広場を作り、サッカーや鬼ごっこ等、子供がのびのびと遊べる場所を作る。また、屋外イベントの会場としても利用できる。



参考イメージ：株式会社犀工房「ろっかくらんど」⁴

⁴ 株式会社犀工房ウェブサイト (http://www.saikobo-japan.com/mokuseiyugu_5.html) より

○**校舎**→大人から子どもまで利用できるようにして、ワークショップのようなイベント会場としても利用できるスペースをつくる。

(1) 町の人が利用できる健康器具やマット、ボルダリングスペースなどを設置し運動できるスペースを設ける。

→健康維持のため。また地域住民の方々の交流場所にする。

(2) 積み木、木のボールプール、木馬、椅子など子供向けの木造遊具なども設ける。

→木育、木の温かみなどに小さい頃から触れるため。

(3) 談話コーナーや学習室をつくり、木育を提供する。

→自然の豊かさや昔林業が盛んだった歴史を活用する。また、木材を使ってワークショップを開催する。



東京おもちゃ美術館の木のボールプール

○**体育館**→スポーツ大会の会場や、今まで通り健康診断の会場として利用できる場所にする。

(1) バスケットボールや地域のスポーツ大会などに利用。

→地域交流を行うため。スポーツでリフレッシュ、ストレス発散にもなる。地区対抗交流戦などを行えば他地区の方々とも触れ合う時間が設けられる。

(2) 提案採用後も健康診断の会場として利用。

→健康診断の会場など、従来の用途でも利用できるようにする。

また木造の遊具などに使われている木を紹介し、矢祭町林業体験ツアーを開催することによって、町内外からの人をたくさん呼び込むことが出来る。矢祭町のPRにもなり、それをきっかけに移住者が増えれば公園の利用価値もあがりたくさんの方が利用するようになる。

6-2-2 内川小学校再利用にあたっての課題

(1) 内川小学校校舎について

既存の学校施設では耐震性の問題や老朽化により、そのまま利用することはできないため減築や改築等、何らかの対処が必要である。減築するにも改築するにも資金が必要なので、まずはクラウドファンディングなど資金集めの方法を考えなければならない。

(2) 運営主体について

公園には職員が常駐する必要はないが、メンテナンスが必要不可欠なため運営主体は必要である。公共団体や民間企業など様々な運営主体が考えられるが、運営に必要な資金や地域に合った運営方針等を考慮し、適切な運営主体を探さなければならない。例えば、町の情勢に精通している町役場に公園管理に関する部署を設置するなどを設置する必要がある。

6-2-3 採用後の展望

以下のような利点が考えられる。

① 木製遊具には独特の温かみや柔らかさ、手触りの良さがある。

→鉄製遊具にはない匂いや香りなどもあり、子どもの好奇心を刺激する。

② 自然豊かな町の中でも景観が損なわれない。

→自然豊かな町の中では、鉄製遊具よりも木製遊具の方が調和を保てる。

③ 木育ワークショップなどのイベントを開催することによって、自分で作ったものが形として思い出に残る。

→作ることを楽しむだけでなく木に対する親しみや経験を発展させることで、木材への理解や関心を深める。

④ 家の中で遊ぶ子どもの割合が全国的に高くなっているが、屋外の遊び場を提供することで子どもたちが外で遊ぶきっかけとなる。

→インターネットやスマートフォンの普及により屋内で遊ぶ子どもが増えているが、特色のある公園をつくることで屋外へと子どもを促す。

⑤ 子どもの遊び場ができることによって、子どもを持つ親同士の親睦につながる。

→親同士がコミュニケーションをとることで家族ぐるみのお付き合いに発展し、地域の発展へとつながる。

⑥ 公園には職員が常駐する必要がない。

→イベント開催時などには必要だが、常に職員を配置する必要はない。

① 一方で次のような懸念事項がある。木製遊具は耐久性が低い。

→腐朽やシロアリ・害虫、カビ、雨などが劣化の原因となり、塗装等の定期的なメンテナンスが必要。

② メンテナンス費用などお金がかかる。

→定期的なメンテナンスが必要不可欠。費用労力で賄える部分もあり、ボランティアを募ることが考えられる。また、イベント化して町外から学生を呼び一緒に作業をすることも考えられる。

③ 収益は見込めない。

→木育ワークショップなどのイベントの参加費だけではメンテナンス費等を賄うには限界がある。

④ アクセスがあまり良くないので行きづらい。

→聞き取り調査の中で、町外からも人を呼びたいという意見があったが、観光地化を目指すならば、何らかの特性や特色を持たせなければならない。

6-3 YUZU 班（長谷川・田中・新井・岡澤・内野）提案内容

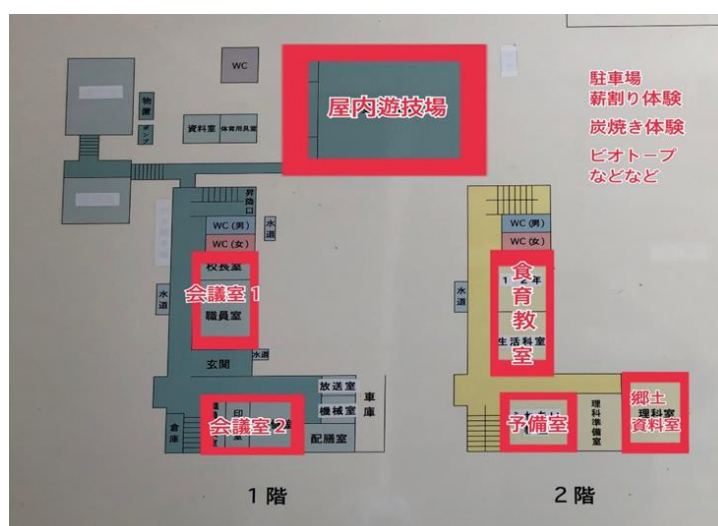
6-3-1 提案概要

○基本コンセプト：「学びの里 内川」

私たちは旧内川小学校を「学びの里 内川」として、「学び」と「遊び」が可能な体験型交流施設にすることを提案する。元々小学校であったということを活かすことで、地域の人たちの思い出や学校への気持ちを大切にする施設にすることができる。今回は「学び」と「遊び」がテーマであるため主なターゲットは地域の小中学生とするが、自然教育を目的とする地域外の小中学生もできるような施設にする。

<この施設でできること>

学び	単発的体験学習（薪割り、特産物調理、歴史物（土器や資料）の見学） 中長期的体験学習（ビオトープ設置 生物観察 植林）など
遊び	室内遊技場での運動、校庭での運動 など



施設転用案

ふれあい館（校舎）1階

〈地域交流室〉地域の方々が集い、話し合いができる場

- ゆず ROOM…校長室と職員室を改装
- あゆ ROOM…職員更衣室、印刷室、保健室を改装

〈その他の施設〉

- お手洗い、放送室、機械室、車庫はそのまま活用
(右図左上の部屋は老朽化が激しいこともあり、今後の検討課題)
→できれば未就学園児などが遊べる場所に
- 配膳室は備品倉庫として活用

ふれあい館（校舎）2階

〈食育教室〉小中学生が地元の食材を使って調理ができる場

- いのち ROOM…学習教室と生活科室を改装
〈郷土資料室〉矢祭町にまつわる歴史的な資料を展示する場
- むかし ROOM…理科室を改装
〈学習室〉地元の子供たちが学習できる場
- こんにゃく ROOM…ふれあい教室と理科準備室を改装

わくわく館（体育館）屋内運動場として活用

遊具等については、地元の子供たちや保護者の要望を聴く

基本的には残っている体育用品を活用する方針

（可能であれば、土日の解放を行いたい）

にここ広場（校庭）屋外運動場、駐車場として活用

薪割りや炭焼きなどが体験できる場所を設ける

ビオトープを設置し、動植物を五感で観察することができる場にする

（※ビオトープの設置は小学生の自然教育の一環とする）

6-3-2 内川小学校再利用にあたっての課題

- （1）内川小学校校舎について
既存施設の活用では、耐震対策や老朽化に伴う補強やリノベーションが必須である。
- （2）運営主体について
矢祭町、法人、組合、地域運営委員会（協議会を含む）などが考えられ、民間による運営が望ましいが、資金源や経営方針により適切な主体を選択すべきである。

6-3-3 用後の展望

- （1）メリット
 - ① 学びの場から新しい学びの場へと生まれ変わる
→矢祭町の自然と歴史を五感で学ぶことができる
 - ② これからの世代につながる施設へ
→変化する環境にも影響を受けづらいう持続性を生み出すことができる
 - ③ 外部の人との交流の場を創出
→都市部では体験できない非日常を提供することにより関係人口を増やすことができる

- ④ 地域の方々が交流できる場を創出する
 - 住民の多様な活動や交流を促すことができる
- (2) デメリット
 - ① 補助陣営の必要性
 - 持続性を保つためには人手への不安がある
 - ② 施設の維持・運営の主体についての課題
 - 行政の管理に置くのか、住民の管理下に置くのか今後課題になる

6-4 D & D 班（今井・大畑・大矢・細田）提案内容

6-4-1 提案概要

「矢祭町複合型交流施設」

現地での複数回にわたる調査を経てリノベーションをする上で必要な条件がいくつか浮かび上がってきた。再活用案の実現可能性の高さ、運用システムの確立、経済活動と結びつけること、持続可能であるかといったことである。これらの条件を満たした上で学生らしさを取り入れることができる提案を目指すことにした。

「複合型交流施設」とは様々な用途として利用できる複合施設かつ町民が集まる憩いの場のことで、具体的には内川地区に限らず矢祭町の町民が集まれるコミュニティの場や、柚子の加工やそれら加工品の販売場所、柚子を使ったカフェを作ること、農業体験や自然体験ができる場所(グリーンツーリズムやガストロノミーツーリズム)を作り、活動の拠点とすることで地域活性化につなげていくことが目的。

3つの施設案のそれぞれの目的と効果

1. 会議や打ち上げとして利用できる場所

・目的 町民の方たちが気軽に立ち寄ることができ、他にも町内行事の打ち合わせやその行事後の打ち上げができる場所を設けることによって町民の方の交流を絶やさずに継続させていきたい。

・効果 少子化の進行による高齢者世帯の増加の現状をから地域コミュニティの希薄化と孤立化を防ぐ。また若者の帰還を待っていてもすぐには結果として現れないのでまずは矢祭町で明るく元気に活動している町民の方たちを中心に活気づけてほしい。

2. 柚子を利用した加工品の販売場所

・目的 矢祭町の特産物である柚子の生産・加工・販売という一連のストーリー性を感じてもらえるようなカフェを運営し町民たちの憩いの場、交流の拠点とすることだけでなく外部の人に向けても矢祭町の魅力を認識してもらえるようにしたい。

・効果 柚子という矢祭町の特産物を利用して地域活性化を見込めるだけでなく、矢祭町民も販売業務に携わることで町の誇りとして感じてもらうようにしたい。

3. 農業体験や自然体験ができる場所

・目的 体験交流を通じて矢祭町の伝統的に受け継がれている農村文化を次世代に継承することや豊かな自然の中で多くの魅力を発掘することでふれあいの幅を広げていく

い。

・効果 矢祭町の関係人口拡大に繋がり将来的には矢祭町の移住・定住を促進する効果が見込める。旧内川小学校を拠点にガストロノミーリズムを展開することで「食」と一緒に矢祭町の雰囲気を感じてもらうことで魅力を感じてもらえるようになって欲しい。

6-4-2 内川小学校再利用にあたっての課題

(1) 内川小学校校舎について

リノベーションする際に現状の校舎の状態をそのまま維持するか3階部分を減築するかが問題となる。減築は小学校の景観が変わってしまうので町民の意見を尊重する必要がある。用途によっては消防法や建築基準法によって減築あるいは耐震工事が必要になる。いずれにせよ巨額の資金が必要になってしまうため、町の事業として行う場合は全町的な重要性・必要性のPRが必要となる。また、随時活用できそうな国や県の補助事業等が無いかを注意深く動向を把握する必要がある。

(2) 運営主体について

地域活性化が究極的な目的ではあるが持続性を高めるためには一定の利益が見込めることも重視する必要もあり運営主体もそれによって変わる可能性がある。

行政を運営主体としたときに矢祭町の財政状況などで施設の方向性が変わる可能性がある。民間を主体とする場合は担い手を見つけることが重要となる。高齢化が進行している町民だけで今後も持続させていくのは難しい。地域復興や活性化を手助けしてくれる助っ人を探し出すことや復興事業のノウハウをもっている専門家の援助を受け最終的には町内で運営が安定するフローを作り上げることが必要となる。

(3) 地理的条件の影響について

矢祭町は山に囲まれており公共交通機関が充実しておらず、車以外でのアクセスが不十分であるためアクセスが難しい、それにより町外からの集客が難しいことが課題となる。集客のためにはSNSなどで情報を継続的に発信していくことが必要でありその担い手となる人も求められる。

(4) 工事費や運営費について

校舎の改修工事や設備の導入には運営を担う団体の独自資金のみで行うことは容易ではなく、やはり援助が必要になってくる。また運営にも費用がかかるためその費用を捻出するのは重要な課題となる。したがって収益化していくことは持続可能性の観点からも必要である。特産品や体験学習事業などを行っていきける魅力が地域にあると考えられるので、十分

なPRができればランニングコストについては賄っていくことが可能ではないだろうか。

6-4-3 採用後の展望

(1) メリット

- もともとは学校であった施設を用いるので内川地区内だけでなく近隣地区や町内全体が合同で集まれる規模のコミュニティの場を作ることによって交流を活性化することができる
- 柚子の加工品を販売することや自然体験の場を設けることで町外の人々にも魅力を発信することができる
- 複合型交流施設は活用案を限定せずに様々な方法で活性化を目指す矢祭町の地域復興の拠点とし、多角的な運営を行うことで矢祭の発展を目指す象徴となる
- 主力事業を一つに限定するよりも収益化のチャンスが増える

(2) デメリット

- 多角的な運営を目標としているが実現するためにそれ専門とする人材や設備に対する費用が増えることや、オペレーションの増加の負担に耐えられ、長期的に従事してくれる担い手が必要
- 多角的な運営は一つ一つの事業に集中できないためどれも上手く行かなくなると施設全体の機能不全をおこすおそれがある
- 矢祭町の少子高齢化は現在も進行中であり今後はさらに担い手となる人材確保が難しくなっていく

7 終わりに

本報告書ではこれまでの箕輪ゼミの活動を示してきた。主題であった廃校の利用案の検討に関しては、一つの案としてまとめることができずはならず、ゼミ内の4班の提案を並列的にまとめることとなったが、これはいくつかの候補を示すと言う意味で意義があると考えている。というのも、旧内川小学校の利用については耐震性の問題や水道の問題など、費用面などの問題もあり、なんらかの形で改修工事をする必要があるが、その費用面での目処が必ずしもついていない状態であるからである。今後なんらかの補助金を探ることやクラウドファンディングなどを構想していく際にも、アイデアとして多様なものを提示し、十分な検討をすることに一定の意義があると考えられるためである。

さらに今後の課題として言えば、そのような資金調達の問題だけでなく、なんらかの形で小学校を再利用できる形にした後にも地域の活力が十分に持続できることを示すような実績を積んでいく必要もあるだろう。

箕輪ゼミでは、今年度発見できた内川小学校の利活用に向けた課題をもとに、さらに検討をさらに深めていくとともに、新たに確認できた課題について次年度以降もさらに検討を加え、取組を続けて生きたいと考えている。

たとえば今後の展望として一つ考えているものとしては、プールの利用を手始めに再利用に向けた具体的な動きをしていけるのではないかと考えている。具体的な動きを行っていく場合は、当然町役場や地域の方々との調整を経ていく必要があり、まだあくまでゼミ内で構想しているものの一つでしかないが、「(仮)矢祭もったいないビオトープール」などのプロジェクトの立ち上げができていければ面白いのではないだろうか。

「ビオトープール」はビオトープとプールを掛け合わせた造語である。「生物の生息空間」を意味し、人工的な自然環境復元を目指すビオトープと、人工的創造物の典型的な形である学校プールという、いわば正反対の原語を重ねあわせた語となる。学校教育の場で使われた人工的なプールは廃校という出来事をきっかけに当初の利用目的が果たせなくなってしまった。まさに矢祭町のまちづくりにおけるキーワードでもある「もったいない」ものとなってしまったのである。それをこれからの未来に向けた取り組みとして、自然の中に根付かせるような活動を地域や学校関係者、行政、そして大学生とが「楽しみながら」結びつけるきっかけとなれる可能性を秘めているのではないかと考えられる。

聞き取り調査などでも、旧内川小学校は「小学校であった」こともあり、「子どもの声が聞こえる場所であって欲しい」といった意見もあった。そして、小学校、PTAなどと協働関係をつくり、今回出てきた提案の要素を繋ぎ合わせる可能性をもった「(仮)矢祭もったいないビオトープール」づくりなどの動きを今後の活動の展開の一つの方向性として考えている。

あくまでこの「(仮)矢祭もったいないビオトープール」は一例に過ぎないが、これからはこれらの活動を通して学んだものをきっかけにさらに地域の魅力を発見したり、生み出

すような実践的な活動に取り組んでいきたいと考えている。